【体験版】好きな人が変態だったので、脅したら処女バレ(自爆)して逆転→溺愛されました。

1

ずっと、斜め後ろから見てた。

午前中の日の光にキラキラ反する茶色い髪も、眠そうにあくびをした後の、目を伏せたときにできるまつ毛の影も、海外の美術館に展示されそうなくらい、整った綺麗な鼻筋も、桜色の薄い唇も。

だから、どんな格好をしていても見抜くことができるの。

十八歳未満はご利用いただけない「そういう」SNSで、偶然見つけた男の娘の配信者。

甘ロリ系のピンクのワンピースを着て、サイドテーブルのライトしかついていないような薄暗い部屋のベッドに座っている。
毛先がゆるく巻かれた金茶色のセミロング。
マスカラと跳ね上げアイラインで強調されたぱっちり二重の目元。
口元は黒いマスクで隠れているけど、首すじの右側に並んだ小さな二つのホクロは見間違えるはずがない。
アキラくんだ。
過激なコメントとスパチャと呼ばれるお布施が飛び交う中、ふりふりと両手を振って、個別にお礼を伝えている。声は裏声なのか、女の子みたいに高い。
私が発見したときには配信が終わりに近づいていて、どんな話をしていたのかまではわからなかった。

それを見つけたのが一ヶ月前。アーカイブは残っていなくて、見たのはその一回きり。
そして、いま現在。

「……アキラくん……？」

なんということでしょう。
用事を済ませるために電車で二時間かけて地元に帰省したら、同じ大学に通う想い人が目の前にいるではありませんか。
ブラウンと赤のチェック柄の秋らしいガーリーなワンピースを着て、白いタイツに爪先の丸いブーツ。大学で見るいつもの茶色いサラサラの髪は、胸まで伸びた金茶のゆるふわウェーブになり、伏せがちなまつ毛はメイクのおかげか、ぱっちりと上を向いている。

あの配信のときと同じ格好の彼が、古いビルから出てきた。
可愛らしい女の子の格好をしたアキラくんは、そのくりくりとした目が飛び出るくらい驚いた表情で、私を見ている。
あぁ、こんなに近くで真正面から見るのは初めてかもしれない。心拍が跳ね上がる。
「アキラくんだよね、同じ大学の、同じ学科の」
「……え、……えと、……コハルちゃん？」
困惑顔のアキラくんは一度、視線を斜め左へ向けて、すぐに私の名前を口にした。それだけで私は飛び上がるくらい嬉しかった。
私の愛してやまない想い人は、私の名前を知っていた。
たったそれだけのことなのに、すでに仲良くなった気になって、この数分の間に沸いた疑問を一気に投げかけた。
「どうしてここにいるの？　どうしたの、その格好、すごく似合っ

てるね。あ、もしかして配信？」
「え？　あ、いや、……ごめん、ちょっとこっち」
手を引かれて出てきたばかりのビルに逆戻りする。
中は薄暗く、ゆったりとしたオルゴールのBGMが流れている。
入って右側には、テレビのような大きな画面にいくつもの部屋の画像が映し出されていて、左側にはウォーターサーバーやドリンクバーでよく見るマシンが並んでいた。
ここって、もしかして……。
初めて訪れた場所に視線を巡らせている間、アキラくんは右手で私の手首をしっかり掴んだまま、大型テレビのようなタッチパネルを指で操作している。
掴まれた手首が気になりすぎて、これから何が起きるのか、想像がつかない。

エレベーターに乗るときも、部屋番号のついたランプが点滅したドアをくぐるときも、アキラくんは一言も話さなかった。
リネンの香りが漂う部屋に入り、やっと手を離したアキラくんは、そのまま数メートル先にある大きなベッドの上に腰を下ろした。
じっと足元を見ていて、ときどき視線が泳ぐ。
その顔が、言葉にならないくらい切なげで綺麗で、私は無意識のうちにスマホを取り出してアキラくんに向けていた。
「ピロン」という場違いにポップな音に、アキラくんの視線がこちらに向く。シャッターマークを押し続けた人差し指は、その瞬間も逃さなかった。ばばばばばばばば。連写。
「しゃ、写真、撮っていいかな!?」
「今撮ったよね!?」

事後報告する私とアキラくんの声がかぶる。
ものすごい勢いで立ち上がり、焦った様子でこちらに来ようとする彼からスマホを守るべく、胸に抱き締めて背を向けて叫ぶ。
「ねえ、なんでこんな格好してるの!?　ここってイヤラシイことする場所だよね!?　アキラくん、この前も女装して配信してたよね!?」
そして、好かれたいのに嫌われる最低な言葉を口にした。
「……バラされたくなかったら！」
目の前まで来たアキラくんの動きがぴたりと止まる。
効果は抜群だ。至近距離にある綺麗な顔立ちに、心臓が止まりそうになる。いつも座っているところしか見たことがなかったから、意外に身長差がないことを知った。少し顔を上げればすぐに目が合う。

「何をしてたのか教えて」
胸のスマホをぎゅっと握り締める。本当は取り上げられる前に今すぐにでもクラウドにあげたいくらいだ。
あぁ、アキラくんが困っている。眉毛が八の字だ。少し泣きそうなのかもしれない。こんな彼も見たことがない。この近さのアキラくんも写真に収めたい。
「……あの、本当に大学の人たちに言わない？」
不安げな彼の言葉に、こくこくと赤べこ二十倍速くらいのスピードで首を縦に振る。
半歩下がったアキラくんが、手を口元に当てたり視線を逸らしたり、せわしなく動く。やがて口元を抑えたまま観念したようにはっきりと口にした。
「オナニーを見てもらってた」

彼の口から出た信じられない単語が私の鼓膜を震わせた。
ぞく、と背筋が痺れる。
こんなお人形みたいな格好の彼が、知らない人達の前で自慰行為を。私が見たあの配信も、そういう内容だったの？　想像して、さらに体が震える。

「じゃあ私も、み、見てもいい……？」
「え」
「アキラくんがしてるところ見てもいい？　見てみたい。そういう配信をするってことは、見られると興奮するんだよね？　じゃあ私が見てもいいよね。知らない人に見られるより、知り合いの私に見られた方がきっとキモチイイよ？」
自分でもびっくりするほど、べらべらと言葉が出てくる。

だって、アキラくんのことを何も知らない人達が、アキラくんの痴態を見たという事実が許せなかった。終了間際に流れていた下世話なコメント内容を思い出す。きっと大半は男の人だ。私よりも先に、おっさん達が。嫉妬でおかしくなりそう。

「ねえ、座って、して見せてよ」

アキラくんの手を取り、ベッドまで誘導する。

性癖を暴露した恥ずかしさからか、撮られた写真をばら撒かれることの恐怖か、アキラくんは素直にベッドのふちに座った。

うつむいているアキラくん。その頬を両手で挟んで無理やり上を向かせる。アキラくんの茶色い大きな瞳が揺れている。可愛い。本当に可愛い。このまま連れて帰りたくなるくらい好き。

「男の人ってどういうふうにするの？」

膝丈のスカートをたくし上げる。紺色のボクサーパンツが出てき

た。特に目立った変化はない。
　アキラくんの前に跪き、露わになった太ももを撫でる。運動とは無縁のような、筋肉のない滑らかな触り心地。膝は骨張っていて堅そうではあるけど、太ももは膝と同じくらい細く、そこだけフォーカスすれば女の子と思われてもおかしくない。
　するすると指先を滑らせるように往復させる。男の人の太ももを触るのが初めてだからよく知らないけど、こんなにキメが細かいものなのか。それともこんな格好をしているアキラくんだから、入念なボディケアでもしてるのかも。
　閉じ切った両足を割るように手を差し入れると、ぷにぷにと柔らかい内ももはひんやりと冷たくて気持ちがよかった。ほとんど無意識の状態で顔を近づける。ボディソープだろうか。甘い匂いがした。誘われるように舌を伸ばす。

「あ……っ」
女の子みたいに高く、短い悲鳴。両足がびくりと跳ねて、私の喉にぶつかりそうになった。立ち膝の状態でアキラくんの内ももに顔を突っ込んで、ちゅっ、ちゅっ、とキスをする。そのたびにアキラくんから息を呑む音と溜め息のような呼吸が聞こえた。それを私の鼓膜がいちいち拾って、知らずに下腹部にキュッと熱がこもる。
あぁ、好き。
大学に入学して、初めてとった講義でアキラくんを見かけてから半年、彼のことが好きで、好きすぎて、ずっと見てきたから、この棚ぼた的な状況はよく分からないけど、逃したくない。
マシュマロのような柔らかい太ももを手のひらや唇や舌で堪能して、今度は蹴られないようにゴツゴツとした両膝を手で掴む。膝裏が汗で湿っていた。

アキラくんの足の間に顔を突っ込んではぁはぁ言っている私も、画面の向こうの人たちやアキラくんと同じで、変態だ。でも半年溜まった欲はこれでおさまるわけがない。

舌を離して顔を上げると、アキラくんは目尻に涙を溜めながら私を見下ろしていた。呼吸が荒く、小刻みに震えている。顔も、耳まで真っ赤だ。さっきまでおとなしかったボクサーパンツの中身も、いつの間にか中心に黒く濡れたシミを作り、窮屈そうに盛り上がっていた。

「……アキラくん？　しないの？」

私の言葉に、アキラくんがゆっくりとした動作でボクサーパンツのゴムに指をかける。はじかれるように出てきたそれは、新種の生き物のように血管が浮き出ていて赤黒く、先っぽから溜まった透明な雫をよだれのように垂らしていた。アキラくんから生えてきてい

るとは思えない。この部分だけ正真正銘の男だ。
初めて見るものに、緊張と興奮で、喉がごくりと鳴る。
グチュッとカウパーを塗りたくるようにして小刻みに動かしていく。うつむいているせいで表情が見えない。ベッドによじのぼり、アキラくんの左腕をまたぐように隣に膝を立てて、耳元に唇を寄せた。
「恥ずかしい？　それとも嬉しい？」
私が聞いても、アキラくんは固く目をつぶって、はぁっ、はぁっ、と水を欲しがる犬のような荒い呼吸を繰り返すだけで答えてくれない。
ただ一心不乱に右手を動かしている。にちゃにちゃと粘り気のある音が聞こえて、生臭い匂いも立ち込めてきた。触りたいけど邪魔になりそうで迂闊に手を出せない。

「……気持ちいい？」
一人置き去りにされたような気分で寂しくて、聞きながらアキラくんの耳たぶを噛む。
「……んっ、うんっ、……気持ちいぃ……っ」
ずりずりと足をガニ股にして、左手でベッドカバーを握りしめてアキラくんが答えた。その声がいやらしくて情けなくて、頬がゆるんでしまう。左肩に抱きつくように腕を回して、耳の中に舌を差し入れる。わざとプチュプチュと音を鳴らしてあげると、アキラくんの背中が引きつった。
「あっ、……うぁっ、みみっ、だめ……っ」
無視をして、どんどん責め立てる。舌を尖らせながら耳孔の中をほじくるようにして抜き差しを繰り返す。だめと言いながら、腰をくねらせるアキラくんの手の動きが一層激しくなった。

「あぁあっ、あぁ――――……っ、いっ、くっ……いくぅっ、……出る……っ」

ぶるぶると全身を震わせた後、アキラくんはぐったりと脱力し、私の腕の中にもたれかかった。亀頭をおさえた右手の指の間から、白く濁った精液がとぷとぷと溢れる。初めに香った甘い匂いは完全に消え失せて、青臭いドロドロとした動物性の匂いが充満する。

アキラくんの重さを感じて、ゾクゾクと身体中に電気が走った。思わず漏れそうになった声を噛み殺す。自分がしたわけじゃないのに感覚が共有されたみたいに、下腹部が勝手にきゅうきゅうと収縮を繰り返す。あぁ、私も欲しがってる……。白濁液にまみれ、アキラくんの細くて長い指に覆われたモノを見つめる。勝手に期待して喉が鳴る。

いやらしくて愛しい、情けなくて可愛い。見たことのないアキラ

くんを見て、より一層好きになった。
　呼吸を整えようと肩で息をするアキラくんを抱き寄せて、その金茶色の人工毛に頬擦りをする。無防備な体が一瞬、強張った。
「これからは私が見てあげるね。アキラくんが気持ち良くなってるところ」
　私の腕の中のアキラくんは、ふるふると小さく震えるだけでなにも言わなかった。

2

入学後に受けた専門教科のガイダンスで、初めてアキラくんを見た。

窓側の席にぽつんと座って、うつむき加減で手元のスマホをいじっていた。シンプルな白いTシャツから伸びる腕は細く、海外の彫刻のように整った小さな横顔は、第二次性徴期を迎えていない少年に見えて、春の柔らかな光に照らされるとそのまま消えてしまうんじゃないかと思うほど、儚げだった。

それまで私の身近にいた男子はというと、プロテインとブロッコリーと鶏胸肉が主食で、「筋肉こそ至高、この世の全て」みたいな価値観と外見の人達ばかりだったから、大学に彼のような存在がいることに驚いた。そして、呆気なく恋に落ちた。その儚げな雰囲気

に撃ち抜かれた。
身も蓋もない言い方をしてしまうと、顔がものすごく好みだった。
アキラくんはなぜか五十人規模の小さな講義室の中、一番後ろの席ではなくて、内職したり眠ったりするには不便といえる後ろから二列目の窓際という、よく分からない席が定位置だった。
だけどそのおかげで私は前期の間、彼の斜め後ろの席を陣取ることに成功し、回ってくるプリントを彼から受け取りつつ、彼と目を合わせることを喜びとしていた。
ひとつだけ難点をあげるなら、アキラくんにはかなり休み癖があるということくらいだった。
通常、ひとつの講義は全十五回で、五回休んでしまうと試験を受ける間もなく単位はもらえない。

アキラくんは前期、私と受けていたどの講義も、単位を落とすギリギリの四回きっちり休んでいた。二回連続で休んでいたこともあり、もしかしたら体が弱いのかもしれないと人知れずハラハラした。

それからいつでも貸せるように、おせっかいかもと思いながらノートを綺麗にまとめておいた。……前期中にそんなやり取りができるまでの進展は無かったけど。

「おはよう、小春」

講義開始十分前。いつものようにアキラくんが座る席の斜め後ろで待機していたら、声と共に隣の席にベージュのトートバッグがどすんと降ってきた。

「おはよう、真希ちゃん」

真希ちゃんは小学校から一緒の幼なじみだ。

私より身長が十センチも低くて華奢で、色素の薄いミルクティー色の髪と白い肌が、なんとも今どきの女の子だ。
数多の異性は、真希ちゃんとすれ違えば絶対に振り向く。それくらい万人受けする外見。
「また睨んで。今日もアキラくんは来ないのかね」
高くて可愛い声で言いながら、隣に座る真希ちゃん。
一つ、残念なところがあるとすれば、話し方が微妙に古風な点だった。ずっと一緒に住んでいたおばあちゃんの影響らしい。
「睨んでないよ。見てただけ」
「真顔が怖いんよ、小春は。朝から機嫌悪いのかと思うわ」
「ごめんねぇ」
真顔が怖いというのは、幼い頃から言われていた。
父親譲りの三白眼と、腰上まで伸びた重たい黒髪、かつ眉毛の上

で切りそろえた前髪のせいか、小学生の折から「真顔イコール睨んでいる」と言われ、ついたあだ名が「お嬢」とか「姉御」なくらい、私の顔面には迫力があるらしい。

加えて、緊張すると早口になって追い詰めるような聞き方をしてしまう。

そういうわけだから、人付き合いが上手くない。生まれてこのかた「モテ」というものを経験したことがない。

私の好きになる人は、真希ちゃんみたいなふわふわ女子に惹かれていって、私はモーゼみたいに避けられる。

そんなことはどうでもいいとして、件のアキラくんはまだ姿を見せない。おそらく三回目の自主休講なのかもしれない。

一昨日のこともあるし、もし私がアキラくんの立場なら、今日は休むか、席をかなり遠くに変える。

一昨日の……、アキラくんは可愛かったなぁ。
やっぱり華奢だから、ああいう可愛いスカートも似合うんだ。身長も思ったより小さかったし、あの、ひとりでしてるときの苦しそうな顔といい、普段の声より高くなる喘ぎ声といい、果ててもたれかかってきたときに感じた絶妙な重さといい、守らなきゃいけない存在みたいで愛おしかった。変態趣味があることなんてどうでもいいと、一蹴できるくらいに。
「……動画、撮ればよかったな」
「なんか言ったか？」
「ううん、何も」
斜め前の空席を見つめながら一昨日の記憶を何度も反芻するうちに、とうとう始業を告げるチャイムがなった。

一番前のドアから教授が入ってきて、ザワザワとせわしなかった空間がすぅっと静かになる。ふと斜め前が暗くなった。

「……っあ」

教授が教壇に立つ数秒前に、アキラくんが音を立てずにいつもの席に座った。白いフード付きのパーカーに黒のスキニーを着た彼は、私の声に気づいたのか、振り向いて「おはよう」まで言ってくれた。

よかった、避けられてないみたい。それどころか、初めて挨拶をした。

嬉しくて隣の真希ちゃんの腕をバシバシ叩く。小声で「……痛いんだが」と迷惑そうに顔をしかめる真希ちゃんも、私がルーズリーフに「アキラくんがおはようって言った！」の走り書きするのを見て、目を丸くした。

入学して半年経つけど、アキラくんが同じ学部の人と会話らしい会話をしているところを見たことがない。

休み癖が彼を孤立させ、誰かと完全に仲良くなるタイミングを失ったのか、いつもひとりで窓際の席にぽつんと座っている。

でも私はそれでいいと思っている。下手に誰かと仲良くなって、この中の誰かがアキラくんの魅力に気づくくらいなら、彼には卒業するまでぼっちでいてほしい。

講義の間、ことあるごとに視線はちらちらとアキラくんを捉える。

夏が終わり、いくらか弱くなった日差しをまとって、薄く茶色に輝く寝癖のついた猫っ毛も、眠そうに目をこする子供みたいな仕草も、口に手を当ててあくびを噛み殺す姿も、誰も見ないで。

激レアなアキラくんを堪能するのに、九十分は短い。
講義の終了とともに颯爽と出ていく教授と学生につられながら、急いでノートをリュックに詰める。
次が空きコマのときは、家に帰らず学食でだらだらしながら真希ちゃんと昼食を食べるのが日課だった。その学食は早く行かないと、お昼を待たずに席が埋まってしまう。
マイペースに筆記用具の片付けをしているアキラくんの後ろ姿に「またね」と心の中で声をかけて、来週も来てくれるように願う。
その瞬間、くるりとアキラくんが振り向いた。
「あ、コハルちゃん！」
「え、は、はい！」
結構な声量で名前を呼ばれて背筋が伸びる。
「今、時間大丈夫？」

「今……」と呟いて真希ちゃんのほうを見る。真希ちゃんは瞬時に察したのか、「先に学食行ってる」とスタスタ講義室を出て行ってしまった。

五分もしないうちに、講義室にはアキラくんと私の二人だけになる。

ここは次の講義で使わないのか、私たちも移動した方がいいのではないか考えていると、アキラくんは「ここ、次の授業で使ったりしないから」と私の隣まで来た。

物理的な距離が一気に縮まって、視界がアキラくんで埋め尽くされて、心臓が爆発しそうになる。

やがて二限目が始まると、廊下にも窓の外にも人の気配がしなくなった。

私たちはお互い、最初の一言を発せずに立ったまま向かい合って

いた。
「……アキラくん？」「……写真」二人の声がかぶる。
「写真のことなんだけど」
「え？　あぁ！　大丈夫！　誰にも見せてないし、何も言ってないから！」
「消してもらえるかな……」
「えぇっ、なん、いやだよ！」
「え、えぇ!?　なんで……？　あんなの気持ち悪いでしょ」
「そんなことないよ！　すごく可愛くて、似合っててびっくりした！」
　またもや「えぇ……」と絶句しているアキラくんに、外見の可愛さ、女装クオリティの高さ、存在の尊さを熱弁する。
　あの写真がいかに私にとって価値のあるものなのか、アキラくん

はわかってない。ただでさえ後ろ姿しか見られないアキラくんの正面、かつ女装姿。そんな姿はしらふで拝めるわけがない。たとえば高校の学祭とかならありそうだけど。というか学祭で売られてたら絶対買う。買い占めてしまう自信がある。

それに、あの写真を消しちゃったらアキラくんとの接点が無くなっちゃう。

あれはアキラくんの秘密だから。

女装して、不特定多数の人達に自慰行為を見せる変態なアキラくんの秘密。それを知ってるのはきっと私だけで。……脅すわけじゃない。

決してそんなつもりはないのだけど、これを好機と呼ばずになんというのか。たとえアキラくんの頼みでも、消してたまるか。

私が繰り広げる演説の熱量に引き気味のアキラくんは、私がどん

なに説いても、彼の頭の中はあの写真をどうやって消してもらうかしか考えてないのだろう。
　ならば、やはり、こうするしかない。
「……写真、消してもいいけど」
「っ、うん」
「また、一人でしてるところ見せて。今、ここで。アキラくん、変態だからできるよね？　この前自分で変態だって言ってたもんね。私も言ったよね。アキラくんが気持ち良くなってるとこ見てあげるって。ひとつ私も要求を飲むから、アキラくんも飲んで」
「……」
　目を見開いて無言のまま、アキラくんが私を見つめる。これがもう少し身長が高くていかつくて、スマホを無理やりぶんどって来そうなゴリラみたいな人種だったら、私もペコペコしながら写真を消

していたかもしれない。
　でも目の前のアキラくんは、要求を聞いてもらえない可哀想な小動物にしか見えなかった。こちらがもっと強く言えば、泣いてしまうかもしれない。
「……わかった」
　少し困ったような薄ら笑いを浮かべて、アキラくんが横にあるイスを引いて座った。
　一か八かの賭けに勝利したけど、絶対、嫌われた。だってこんなのフェアじゃない。アキラくんをただ困らせただけだ。
「コハルちゃん」
「うん!?」
「俺も相当変態だけど、コハルちゃんも大概だね」
「……そ、うかな、そうかも」

「気持ち悪いとか思わないの？」
「あ、それは全然思ったことない」
即答する私に、アキラくんは安心したようにへにゃっと頬を緩ませた。うぅ、可愛い。
あんな状態で果たしてちゃんと勃つのかと思ったけど、余計なお世話だったようで。
黒いスキニーから取り出されたそれはすでに十分に大きかった。元が大きいのかもしれない。
ホテルで見たときのアキラくんは、部屋のせいで手元が暗かったし、まじまじと集中して見れるほど私の心の余裕もなかった。
立ったままだとアキラくんのつむじしか見えないから、私もイスを取り出してアキラくんの前に座った。アキラくんの邪魔にならない程度に近づいて、腕を伸ばせば太ももに触れるくらいまで距離を

つめる。
バニラのような甘い柔軟剤の香りが鼻腔をくすぐった。前のめりになりながら無防備なアキラくんを見つめる。
ふと顔を上げるとアキラくんも私を見ていた。いたずらっぽく微笑まれて、私の方がいけないことをしているみたいな気分になる。
大きくはあるけどまだ十分に勃起してはなかったのだろう。アキラくんが動かすたびに、手の中のチンポが少しずつ頭をもたげ始めた。
目の前で一人でされると心細くなって、やっぱりどうしても触りたくなる。滑り落ちるようにアキラくんの両足の間にペタリと座り、イスの縁を握っていたアキラくんの左手を取った。
身長は私とそんなに変わらないのに、手は私のよりずっと大きくて、関節がわかりやすくごつごつしていて紛れもなく男の人のそれ

だった。
すりすりと頬擦りして、人差し指を指を口に含む。口の中で、アキラくんの爪が私の舌を引っかいた。ピリッとした痛みをごまかしながら舌を絡める。
別に美味しくもなんともないのに、何か高級なものを味わうように、一心不乱に舌を動かして頬張る。
「……っ、コハルちゃん……」
アキラくんの声が高くなった。苦しげで可愛い。その声で名前を呼ばれると頭の中の血が沸々と沸騰する。
もっとしたくなって、口の中の指を2本に増やす。指の間から涎の滴が滴るほど夢中でしゃぶると、アキラくんの体温でバニラの匂いが濃くなった。
アキラくんの指が、自分の口の中に入っていると想像しただけ

で、私も体が熱い。さっきから興奮状態になっていて、身体中のゾクゾクがとまらない。
口の中も痺れて気持ちいい。ふと、アキラくんのチンポが目に入る。指を舐めるのに夢中になっていて忘れていた。
アキラくんの手ですら収まりきらなくなったその部分を見ていたら、どうしても我慢できなくて触りたくなった。
「わ、私も、触っていい……っ？」
返事を待たずに立ち膝になって手を伸ばす。屹立を握っていたアキラくんの指を剥がして、自分の指を巻きつける。熱い……。熱くて大きくて太くて硬い……。どう握っても半分くらいしか包み込めない。とろとろのカウパーを指に絡ませながら、クチュクチュと上下にしごいていく。
「コハルちゃんの手、冷たくて柔らかくて、気持ちいいね……」

うっとりとした声でアキラくんが呟いた。背骨が抜かれたように上半身をくったりとイスの背もたれに預けたアキラくんの左手が、ゆるゆると私の唇に触れた。

半開きの唇を割るように、人差し指と中指が差し込まれる。

「んぅ、ふっ、…んぁっ…んく…」

溢れてくる唾液を飲み下しながら、アキラくんの指に吸い付いて舌を這わせる。

最初、突っ込んでいただけのアキラくんの指は次第に私の口腔内を探るように、中で指を曲げたり歯列をなぞったりしてきた。

私も好き勝手に動く指を追いかけて、舌を絡めて爪を甘噛みする。きもちいい……。口の中なのに、下半身を弄られてるみたいに連動して、勝手にお腹の奥が震える。

「ふっぅ、ん、ちゅ……えぅっ」

舌の奥のつぶつぶした部分を撫でられて、思わずえづいてしまった。指を吐き出し息を整えると、はぁはぁと喘ぐ口の端から透明な涎が伝う。

つぶっていた目を開けると、面白がるように目尻を下げて、アキラくんが私を見下ろしていた。

懲りずにまた指を突っ込んでこようとするアキラくんから、首を振って顔を背ける。

「ダメ……？」

子犬のような目を向けられて一瞬ほだされそうになったけど、きゅっ、とチンポを握る手に力を込めてしごきあげた。

「……ダメ。ちゃんと集中して」

今度は邪魔されないように、チンポを握ったまま立ち上がり、アキラくんの足の間に膝を入れる。

そうしたのはアキラくんに近づくためと、自分の足で立ってられなかったから。
アキラくんが甘えるように、私の胸に顔を埋めてしがみついてきた。グチュグチュと粘液と空気の混ざり合った音が鼓膜を刺激する。
アキラくんは私の涎まみれの左手で私の服をしわくちゃになるほどつかんで、苦しそうに不規則な呼吸を繰り返していた。
深く吸い込んだ空気が熱い息になって、布に染み込んで胸にかかる。
くにくにと指先で鈴口をほじって、際限なく溢れてくる透明な汁を潤滑剤にしながらパンパンに張り切ったカリ首を指の輪っかを作って絞るようにキツめに動かす。
私の胸の中で震えながらはぁはぁと呼吸を荒くしているアキラく

んの反応を見ながら、次もまた気持ち良くなってもらえるようにアキラくんの弱いところは全部覚えたい。
「コハルちゃ……」
息も絶え絶えな状態なアキラくんが、チンポを握っている私の手に自分の手を重ねてきた。動きを止めるように力が込められる。
「……どうしたの？　痛かった？」
「……ちが…っ…」
「じゃあアキラくん、手、どけて」
「んっ、コハルちゃん、もう……っ」
前髪を汗で濡らして眉間に皺を寄せながら、アキラくんがふるふると首を横に振った。イキたいはずなのに我慢をする理由がわからない。こんなに苦しそうなのに。
「アキラくん、イっていいんだよ？　私の手にいっぱい手に出し

ちゃっていいよ？」
　アキラくんは首を横に振り続けて、私の胸に顔を埋めた。ふぅふぅと息が上がり、私が手を動かすたびにぶるっと身震いする。なんで意地になってるんだろう。イキたいくせに。しがみついているアキラくんの華奢な肩を無理やり押して引き離す。白いシャツの胸元に、透明な糸が伝った。そのまま腰をかがめてアキラくんの耳をしゃぶる。
「あぁっ、はっ……ぅあっ」
　ガクンと、脱力したアキラくんの背中が椅子の背もたれに当たった。耳が弱いって知ったから、わざとらしくグチュグチュと音をたてて耳孔をほじくる。
「っ、はっ、うぅっ、……ぁあっ……っ」
　短く叫んだアキラくんが両手で私の手ごとペニスをつかんだ。手

の中で脈打つ初めての感触に引っ込めそうになったけど、アキラくんの手の力は思いのほか強く、私の手の中のチンポは痙攣に合わせて熱い粘りを吐き出した。

ビクビクと脈動する熱を感じながら、これが自分の中に入ったらと思うと、一度も触れたことのない体の奥から熱いものが溢れてくる。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

講義室を出てすぐの手洗い場で、後処理に使ったハンカチを洗っていると、見計らったかのようなタイミングでスマホのバイブ音が鳴り出した。待たせすぎた真希ちゃんかもしれない。

「……あ、俺だ」

アキラくんが、平然とスキニーの尻ポケットからスマホを取り出した。
さっきとは全然違う低い声で電話の向こうの相手と話している。誰なんだろう。友達……？　講義の間ずっと一人でいるアキラくんが、誰かと電話しているなんて変な感じだ。
ハンカチを洗う水の音を弱めながら、電話から漏れる声に耳を澄ませる。結局、男か女かわからないまま、通話が終わってしまった。
「コハルちゃん」
「はいっ」
「学食行くなら一緒に行こう」
学部棟を出て学食に向かっている間、アキラくんといろんな話ができた。

元々性欲が異常に強く、見られることで性的興奮を覚える変態だということ。この前、私の地元にいたのはやっぱり配信のためで、女装をしているのは身バレ防止と単にウケが良かったから。
「じゃあ、アキラくんは別に男の人が好きなわけではない？」
「うん、見られたいだけ。好きなのは女の子だけど、見てくれる対象は男でも女でもどっちでもいい。でもこういう性癖って、友達には言えないでしょ。だから同じような立場の変態な人達に見てもらってたわけだけど、まさかコハルちゃんにバレるなんて」
「あ、ごめん、あそこ地元なの」
「……もう行けないな」
「え、またそういうことするつもりだったの？」
「ううん、もうしないよ。アカウントも消す。だってこれからはコハルちゃんが見てくれるんでしょ？」

「う、うん」
「やっぱりコハルちゃんも変態だね」
からかうわけではなく、同志に会えて嬉しいみたいなニュアンスでアキラくんが笑った。
正確には、私は見たり見られたりが好きなんじゃなくて、アキラくんが好きだから見たいし触りたいだけなんだけど……。
そう訂正したかったけど、アキラくんの嬉しそうな顔を見たら、恥ずかしさが込み上げてきて言えなかった。

学食に着くと、ほとんどの席が埋まって賑やかというよりもうるさかった。
入り口付近では、大学生活をめちゃくちゃに楽しんでいそうな5人の男女グループが、長テーブルをくっつけ合ってバカ騒ぎしてい

た。あぁ、私の苦手なタイプだ……。そう思っていたらスーツ姿の一際目立つ背の高いホストみたいな黒髪の男の人と目が合った。
「おー」と知り合いでもないのに片手を上げられる。
「起きてたか、アキラ」
イスから立ち上がり近寄って来た男の人が、私たちの前に立つ。目の前に来られるとその背の高さに圧倒される。身長いくつあるんだ……。私とアキラくんの頭一つ分くらい余裕で違う。
「今日は寝坊しなかった」と怯える様子もなく、ホストみたいな男の人と会話を続けるアキラくんを見て、ようやくこの二人が知り合いなのだと理解する。
ふわふわした天使のようなアキラくんが、この巨神兵ホストと友達なのが微妙に信じられない。顔面偏差値は、まぁそこそこといったところか。私の好みではないが、世間的にはモテるんだろうなと

は思う。足元を見る。天然ででかいんだ……。うわぁ。
「そっちは？」
視線を向けられて、背筋が伸びる。
「コハルちゃん。同じ学部の一年生」
アキラくんが紹介してくれて、慌ててフルネームを名乗った。
巨神兵は別学部の三年で、アキラくんの部活の先輩なのかと思いきや、高校の同級生だったという。
「……え、三年なのに高校の同級生……？」
「あ、俺、二回ダブってるから、コハルちゃんの歳上だよ」
年齢の計算が合わなくて思わず声に出すと、隣のアキラくんがあっけらかんとした声で答えた。
「えぇ!?」
「あはは、こいつまじで朝起きれないし、苦手な講義の内容も全然

覚えないからさ、次もまた留年しないように勉強教えてやって。よろしくね」
「コハルちゃん、よろしくねー」
軽い調子で話続けて、アキラくんとその友達は騒がしい集団の中に帰っていった。

私は真希ちゃんを探すふりをしながら、さっき聞いた情報の処理をしていた。アキラくんの可愛さから勝手に同い年かと思っていて、なんなら歳下のように「かわいい、かわいい」って思ってて、でも歳上で……、生意気だと思われてたらどうしよう。
あのチャラついた集団の中で私のことを話してたらどうしよう。大学に入って部活もないし、体育会系みたいな年功序列の悪習からやっと逃れられたと思ったのに。

「どこまで行くんだ、お嬢」
声と同時に腕を引っ張られる。真希ちゃんだった。
アキラくん達のグループからほんの数席後ろに離れただけの位置に座っていたらしい。三人掛けの長テーブルの端っこに一人分のカレーが乗っていた。その隣の席にリュックを下ろす。
「ごめんね、遅くなって」
「うん。先に食べてた。アキラくんとなんかあったか？　……どした、それ」
真希ちゃんの視線の先には、私が握りしめていたずぶ濡れのハンカチがあった。咄嗟に顔の前まで持ってくる。アキラくんの匂いはもうしなかった。石鹸と、自分がいつも使っている柔軟剤の香りだけ。少し、残念。
「あ、えーっと……、鼻血出ちゃって」

「アキラくんの前で？」
「う、うん」
「興奮したんか。ピュアな少女漫画みたいだなー」
ケラケラと笑いながら、真希ちゃんは途中まで食べていたカレーを頬張り始めた。
……ピュアな少女漫画では好きな男の子のオナニーは見ないし、付き合ってもないのに触ったりしないんじゃないかな……。そう思ったけど唯一の友達が減りそうなので言わないでおいた。